

落語プロット「祝の壺」 桂米朝

- ① 枕。昔はどの家にも水壺というものがあつた。特に水が悪い大阪では、水壺は庶民の必需品であつた。
- ② 貧乏人Aと貧乏人Bが路地で出会う。貧乏人A、貧乏人Bに「酒を飲ましてあげる」と言う。貧乏人A「それも酒屋の立ち飲みじゃない、立派な宴席で三味線を聴きながら酒を飲ましてやる」と言う。貧乏人Bは「それはうれしいが、銭はあるのか？」と聴く。貧乏人Aは「銭はないが、飲める方法がある」と言う。
- ③ 貧乏人Aは昨日、昔安酒屋でなじみだつた「このや」という芸者と出会つた。このやは独立して新しい店を出したところだと言う。このやは貧乏人Aに「ぜひ店に来てくれ」と言う。貧乏人Aは、「開店祝いに何か持っていきたいが何が必要か？」と聴く。このやは「お馴染みさんたちに色々な物をもらったので、一通り揃つているが、水壺だけがない」と言う。貧乏人AはBに、「なので水壺さえあればただで酒が飲める」と言う。何故ならば、お茶屋が開店したての時は、何かお祝いを持っていけばただで酒を振る舞う習慣があるからだ。
- ④ 「なるほど」という貧乏人B。2人は水壺を買うために古道具屋に行こうとするが、水壺の相場（2円50銭）を出せそうにない。なので、傷物でよいから値切ろうと計画を立てる。しかし、Bは8銭、Aも17銭、併せて25銭しかない。これで何とか古道具屋にかけあおうとする。
- ⑤ 古道具屋に着いた2人。店主に水壺を出してくれと言う。古道具屋には立派な水壺が沢山ある。店主はその中の良さそうな壺を2円15銭のところを、おまけして2円で良いと言う。が、2人には2円が出せない。その後、色々な水壺を紹介してもらうが、25銭では到底足りない。
- ⑥ らちが明かないので、貧乏人Aは思い切つて自分たちは25銭しか持っていない。無理は承知だが、これで買える壺はないかと言う。店主は「それでしたら外へ」と言う。そこには雨だれ受けの壺があつた。その壺に傷はない。が、いわくつきの壺であつた。店主が話す事には、前の持ち主はお金持ちのご隠居さん、ある時大層な熱病にかかつた。医者は理由がわからなかつたが、呪い師が「鬼門に便所を作れ。そこで一度用を足せ」と言う。ご隠居さんはそこで用を足したら本当に熱が直つた。要が済んだのでご隠居は壺を古道具屋に渡した。といういわくだつた。
- ⑦ その壺には底の部分に黒い色がある。それは隠居の熱の塊だつた。しかし、AとBはそれを承知で壺を25銭で買う。2人はそれを担ぎ、店に向かいながら掘り出し物だと自画自賛する。そして、人にあげるものだからそのいわくも関係ないと言う。2人は一応壺を洗うが、黒い染みは取れない。2人はその後店に向かう。
- ⑧ 2人は店に着き、女芸者このやに壺を渡す。このやは壺を褒める。このやは2人に店に上がってくれと言う。予定通りの2人。2人は座敷で酒を出してもらう。

- ⑨ まだ時間が早いので仕出し屋が来ていない。このやは酒のつまみに漬け物を出す。2人は漬け物をつまみにどんどん酒を飲む。このやはその後、卵の吸い物を出してくれる。
- ⑩ 困った顔のB。Aが何故と聴くと、この吸い物の水はあの壺の水を使ったのではないかと言う。このやに聴くと、早速あの壺を使わせてもらったと言う。吸い物を飲めない2人。Bは、漬け物を切る時、あの水壺の水で洗ったのではないかと言う。
- ⑪ このやは年増の芸者を呼んでくれる。芸者と掛け合いをする2人。年増芸者は浮かれて、「千寿壺に浮かれた」とAが言うオチ。